

豊中・古池遺跡

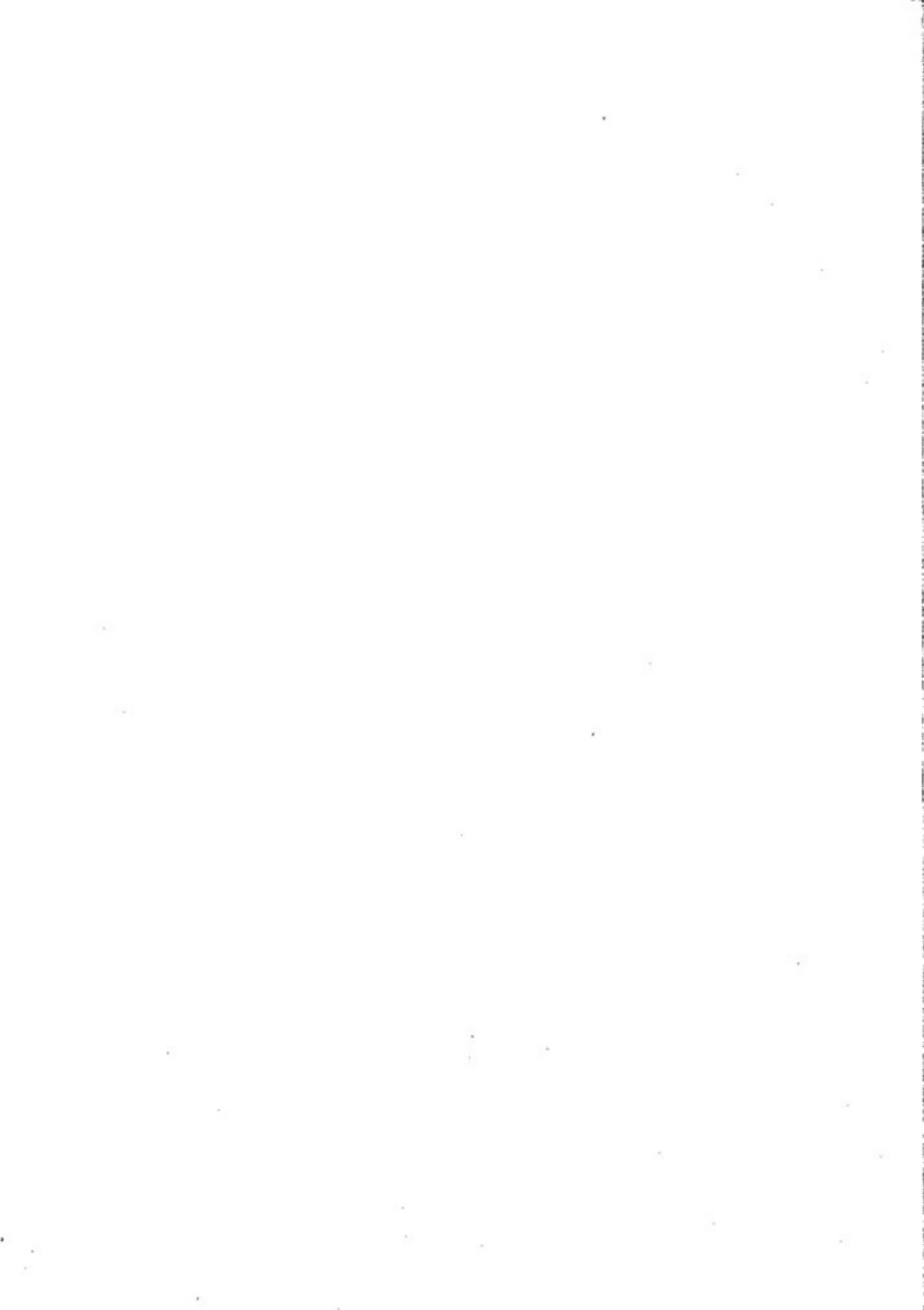
発掘調査概報

そのⅡ



豊中・古池遺跡調査会

1974. 3



蒼　　氓　　の　　跡

昭和48年11月の範囲確認の試掘調査により、豊中遺跡の規模の大様が推測された。

その結果今回発掘調査を行うこととなった。

調査は昭和49年8月5日より開始し、全月31日をもって終了した。短い調査期間であったが多くの成果が得られ、豊中遺跡の性格の一端が把握されたことは大いなる収穫であり喜ばしいことである。

泉州地域が気候温暖、水利に恵まれ、肥沃な地帯で農耕に適し、早くより開発されたことは明らかである。本市豊中地区もその一部であり、近くには弥生時代の大遺跡（池上・曾根遺跡）を包蔵し古くより開けていたことを物語っている。今回の調査により古代よりの祖先の生活の跡が永い眠りから醒め、我々の眼前に現れ、歴史の悠久さと未来への指向を語りかけていることに胸をうたれる。

我々は耳をすましてそれを聞き、記録に遺さねばならない榮誉ある責任を感じる。

この刊行がその一助ともなれば幸である。

豊中・古池遺跡調査会

理事長　土屋　英六

例　　言

1. 本書は、豊中・古池遺跡調査会が、泉州大津市豊中区画整理地区に於いて行なった、昭和48年度発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査の経費は、泉州大津市区画整理事業よりの委託費による。本調査にあたって、区画整理事務所の高岡所長をはじめ、全職員の方々の御援助を得たことを感謝します。
3. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師井藤徹、泉州大津市教育委員会社会教育課坂口昌男が担当して、昭和49年8月5日に着手し、同年8月31日に終了した。この間、前田豊邦氏をはじめ、辻本二千、西本孝男、石原敏之、大庭謹らの諸君が参加した。
4. 本書の執筆、遺構整図・写真は坂口が行ない、遺物整理・実測・写真は、大阪文化財センター池上事業所が行なった。
5. 本書では、写真・実測図に共通する土器番号を付け、本文でもこの番号を用いた。

豊中遺跡発掘調査概要

第1章 調査の経過

大阪府泉大津市豊中地区に於いて、昭和40年に第二阪和国道に伴う区画整理事業の施行が計画され、すでに事業の一部は完了している。この地域一帯は、以前より弥生時代以降古墳時代～歴史時代にかけての遺物が散布しており、第二阪和国道敷地予定地内では、大阪府教育委員会の発掘調査により、昭和48年には住居址が発見されたりして、豊中遺跡の一端が明らかになりつつある。又昭和48年10月～12月にわたって行なわれた、豊中・古池遺跡調査会による範囲確認調査では、東西600m、南北400mの範囲に、31箇所の試掘坑を掘り、ほぼ全城に遺物包含層が認められた。よって当調査会は、泉大津市区画整理事務所に、発掘調査の必要なことを報告し、その結果今回の発掘調査となつた次第である。

昭和48年度発掘調査として、昭和49年3月5日に、区画整理事業施行者茶谷徳松泉大津市長と、豊中・古池遺跡調査会理事長土屋英六との間で、委託調査契約が締結され、すぐさま調査にはいり、多くの成果をあげ、同年3月8日をもって調査は終了した。

今回の調査の対象となった地域は、区画整理事業の街路予定部分で、昨年の試掘調査に於いて、多数の土師器、須恵器等が出土し、住居址が存在すると考えられたトレンチ番29、30、31の試掘坑を含む部分である。すなわち18号道路及び23号道路の西半分である。この箇所は、区画整理事業の昭和48年度実施計画箇所の第一工区にあたるため、工事計画を変更して実施を延期してもらった所である。

18号道路は、巾6m、長さ90mである。この範囲内の表土を剥ぎ、その内南側40mを人力掘削により掘り進め、調査を行なった。又23号道路の西半分、すなわち巾6m、長さ100mは、表土剥ぎを行ない、調査は翌年度に行なうこととした(PL-9)。

第2章 位置と環境

豊中遺跡は、大阪平野の南部、泉大津市豊中に所在する遺跡である。南海本線泉大津駅より東南に約1800m、阪和線和泉府中駅より北へ1000mの所で大半は農地である。信太山丘陵より西に派生した舌状の微高地に立地し、標高は海拔12m～15mで、東南より北西に行くにしたがって低くなっている。この地は古くから開発された水田地帯で、条里制遺構が整然と残されており、字名もそのことをよく表わしている。

豊中遺跡の規模は、南北約700m、東西約500mで、北西には古墳時代の集落跡及び墓跡の存在する七ノ坪遺跡、北は弥生時代の大遺跡である池上・曾根遺跡、南は縄文時代後期の土器も出土したが、古墳時代以降の集落跡の古池遺跡、更には和泉国府跡へと接続している（PL-8）。付近には大きな河川がなく、溜池が多く存在するのもこの地方の特色である。又昔はいたる所に湧水の箇所があり、「和泉」の地名のいわれであるとされている。

最近は、池が埋め立てられ、農地は宅地化され、この遺跡の周辺にも住宅の波が押し寄せ、遺跡内的一部分は既に家屋が建てられている。中央部をほぼ東西に府道泉大津中央線が走り、第二阪和国道が完成し、区画整理事業が完了すると、この辺の市街化は急速に進むものと思われる。

第3章 調査方法

区画整理地域全域に一辺2.5m方眼の地区設定を行ない、南北の線に東側より数字0～99を、東西の線に南側よりアルファベットA～Yをあてはめた。両者を組み合わせてグリッド名を呼び、 $2.50\text{m} \times 6.25\text{m}$ の範囲を1単位とし、南側よりA地区、B地区……と呼ぶことにした（PL-9）。

現地では南北に1列、すなわち6ラインと、東西に1列、すなわちRラインに20m間隔で基本杭を打ち、今回の調査対象地域には、2.5m間隔の補助杭を打った。この2.5m間隔の補助杭は、遺物出土地点を明確にするには便利であったが、調査過程に於いて、しばしば邪魔になった。その為、調査途中でき

ほどさしつかえのない杭は抜いた。

記録は、20分の1の平面実測図、大型カメラと85%カメラによる白黒写真及びカラースライドの写真撮影によった。

出土遺物については、その洗滌、整理、復元、実測、写真撮影は、大阪文化財センター池上事業所第2遺物整理室（室長 酒井龍一氏）に委託した。

第4章 遺構

A地区（PL-12、PL-13、PL-14）

表土（約15cm）、床土（約10cm）を除去すると、黄灰色土があらわれた。この層の上面に土師器、須恵器がくい込むように入っていたが、特にV-8、W-8の地区にまたがる壁際の部分には、深さ約12cmまで、押しつぶされた形で土師器壺が約十数個体（PL-4、PL-17、4・5）及び土製支脚器1個（PL-6、PL-17、8）が出土した。これらの土器は、一時に埋もれたものと思われるが、遺構は検出できなかった。この土器群は、乳茶色をした粗いタキ目整形で平底を呈するものと、黒褐色をした細かいタキ目整形で尖った底のものと二種類あった。

ピットは41箇発見された。これらは柱痕又は杭痕と考えられるが、柱痕の相互関係は不明であったばかりか、両者を明確に区別することはできなかった。比較的大きな不整形のピットはA18、A21、A22、A28、A27は、底が浅くて土師器、瓦器を含む灰色土が入っていた。他のピットには暗灰色土が入っており、特にA82、A41、A42のピットには土師器、須恵器の破片が含まれていたが、土器の形及び大きさを想定しうるものは、ほとんど存在しなかった。

B地区（PL-15、PL-16）

表土（約15cm）、床土（約10cm）を除去すると黄灰色土があらわれ、A地区同様、上面に土師器、須恵器がくい込むように入っていた。

この地区からは、ピット18箇の他に、隅丸方形の竪穴式住居址1、溝1が

検出された。ピット間相互の関係はやはり不明であるが、B 2、B 5、B 1 2 のピットは、直径約8.5cm～4.0cm、深さ約1.5cm～2.5cmで、間隔は約2mと一定していて一直線上に並ぶ。これらは柵列か杭列の跡と思われる。

この一列の方向は、条里制遺構の方向と一致している。

B 7 からは土師器片、B 1 2 からは土師器片、瓦器片、炭化木、B 1 2 からは土師器片、須恵器(1)がそれぞれ出土した。

竪穴式住居址(PL-2、PL-11)

B地区A-1、A-2、B-1、B-2、C-1、C-2に於いて、黄灰色土の面を掘り込んで作られている。住居址の上面は後世に大巾に削られているようであるため、完全な形で検出することはできなかった。規模は、東南辺約4mで、北東辺は約2mまで、南西辺は約1m80まで測れるのみで、北西辺については全く不明である。

床面から現存する壁の立ち上りは、北東辺で9cm、東南辺で12cm、南西辺で2cmを測る。床面は北側が高く、南に行くにしたがって低くなっている、比高差は約7cmである。上面に於いても北側が高く南側に低く、比高差は約5cmである。

全体の形は、隅が丸く、東南辺がやや外側にふくらむ、推定約4m四方の隅丸方形の竪穴式住居である。なお壁に沿う周溝は検出できなかった。最初から存在しなかったものと思われる。

床面には大小5個のピットが掘られており、そのうちの2個からは、炭及び焼上がりが検出されたため炉跡と考えられる。それを1号炉、2号炉とした。この2個は同時代のものか、時期差があるのかわからない。

方形ピット 東南辺の壁際に掘られており、規模は北東辺約6.0cm、北西辺約8.0cm、南西辺約5.0cm、東南辺約1.00cmの大きなピットである。床面より約1.0cm下ったところに、巾2.0cmほどの段を設け、更に1.8cmほど深くなる。用途は不明であるが、貯蔵穴の可能性がある。中より、土師器片及び、土師器高杯の杯部破片が出土した。

1号炉(PL-2) 直径約6.0cm、深さ約1.0cmで中には炭及び焼土が堆

積しており、その上に上半部が削られた土師器甕（7）で、現存値が、直径15cm、深さ6cmの底部1個が存在した。そしてこのピットの中に更に、直径15cm、深さ20cmの小さなピットが掘られており、そこからも炭、土師器片が出土した。

2号炉 直径約60cm、深さ約8cmで炭の混じった土が埋もれており、その周辺の床面にも炭が付着していた。1号炉とほぼ同じ規模で、炭が検出されていることからして、やはり炉跡と考えたい。

他に直径約85cm、深さ約11cmのピット及び、直径約80cm、深さ約14cmのピットが検出されたが、その相互の位置からして、柱穴と考えるには少し無理があると思われる。

この住居址からは土師器片が出土したのみで、須恵器は発見されなかった。床面を検出すると、50cm～70cm巾の溝の跡があらわれた。

溝

C-1の壁際からB-8の壁際の方へ向かって、東側で縁巾1m、溝底巾70cm、西側で縁巾50cm、溝底巾20cm、深さ18cmを測る溝が検出された。東から西へ向かって流れている。西の方で狭くなっているのは、住居址の床面で測るために、本来は東側と同様の規模であったであろう。この溝は灰褐色土で埋められており、土師器甕及び壺、石が東壁付近と西壁付近に発見された。土師器は平底のもので、粗いタタキ目整形を施したもののみであった（PL-5、PL-17、8・9）。中に埋もれている土層及び出土遺物の状態から考えて、この溝は自然に堆積したものではなく、人為的に短期間の間に埋められたものと思われる。竪穴式住居は、この溝を埋めて作っていた。

大形ピット B18 (PL-8)

D-1、D-2の地区にわたって、黄灰色土面に、直径約70cm、深さ約35cmの比較的大きなピットが掘られていた。暗灰色の土が埋もれており、底部より約10cm浮いた位置に、横倒しの状態で須恵器の長頸壺（PL-6、PL-16、1）1個が完形品で出土した。他に土師器片、須恵器片が少數含ま

れていたが、このピットの性格は不明である。

トレンチ

B地区 J～Yの西壁に沿って巾 80cm、深さ 60cm のトレンチを掘った。その結果床土の下層より、瓦器及び土師質の灯明皿が多数検出された（PL-6、10・11・12・13・14）。この地区は、本年度は発掘調査を行なわなかつたので、どのような遺構が存在するか不明である。

追記

本調査を行なっている時に、府道泉大津中央線の北側で下水道管埋設の工事が行なわれ、その際 PL-9 の X 印の箇所で土師質の土鍋（2）が発見され、工事関係者によって我々に報告された。土鍋は、歩道より約 1m～1m20 下の灰褐色土層中に含まれており、すでに破片となっていた。他にも多数の土師器の小破片が出土していた。

第 5 章 遺 物

出土した遺物は、土師器、須恵器、瓦器である。溝、土器群より出土の土師器、大形ピット（B18）の須恵器を除いては、ほとんどが小破片で復元は不可能であった。なお写真番号と実測番号は同一である。

土師器

甕 A (4)

口径 17.6cm、腹径 23cm、器高 22.5cm。「く」の字形に外反する口縁部で、端部はわずかに肥厚させ、断面は三角形を呈している。最大腹径は中位にあり、丸底気味の尖底をもつ球形の胴部である。口縁部は内外面とも横ナデ仕上げで、厚さ約 4mm である。器体外面は細かいタタキ目整形を上半部は左下りに、下半部は左下りと右下りを交叉させて施している。内面は箝削りが施

され、器壁の厚さは3mmである。色は暗茶褐色で金雲母の粒子を含む。胴部下半部には煤が付着している。

壺B(5)

口径16.2cm、腹径22cm、器高24.1cm。「く」の字形に外反する口縁部をもち、口縁端部は、わずかに肥厚している。最大腹径は器体中位よりやや上にあり、口縁部径を越え肩が張る。底部は尖り気味で、不安定である。口縁部外面は横ナデにより凹凸をなし、内面は横方向の刷毛目を施し、厚さ4mmである。器体外面は、上腹部は細かいタタキ目整形を左下りに、下腹部はほぼ垂直からやや右下りに施されている。内面は箝削りがなされ、器壁は2mm程度の薄いものである。色は暗褐色で、胎土には金雲母の粒が多数含まれている。胴部下半部には煤が付着している。

壺C(8)

口径13.9cm、腹径18.7cm、器高16cm。口縁部は「く」の字形に外反し、先端は尖り気味の丸味をもち、やや内彎する。粘土紐による接合部分が残っている。最大腹径は胴部中央にあり、口縁部径よりやや小さい。底部はわずかにあげ底をなす平底で厚さ約1cmある。そして底面に木葉痕とモミ痕が認められる。口縁部外面の下部にまで胴部からのタタキ目整形がおよんではいる。器体外面は、上半部においては水平方向の、下半部においては左下りの粗いタタキ目整形を施しているが、中央部には施されていない。器壁の厚さは約4mm～6mmである。底部内面は箝によるカキ取りがある。外面は明赤褐色、内面は淡灰褐色で、焼成は良好である。

壺D(9)

口縁部欠損の為、口径は不明であるが、推定17cm程度であろう。器高は22cm程度。腹径17.2cm、最大腹径は胴部中央部にある。底部はわずかにあげ底をなす平底で、厚さ9mmである。器体外面は、上半部は左下り、下半部は左下り～水平の粗いタタキ目整形を施しているが、接合部分は明確に観察しうる。

内面はナデによる仕上げで、中央部は箒によって抑えられていて、接合部分は消されている。器壁は6mm程度で、外面赤褐色、内面灰褐色で、焼成は良好である。

壺(7)

口縁部欠損の為、口径及び器高は不明である。現在高12.5cm、腹部径18.5cm。胴部はやや球形で、肩部、腹部、底部の三箇所に接合部分がある。底部は平底で、直径2.5cm、厚さ1.8cmとやや小さい。刷毛目や箒削り痕は遺存しない。色は乳褐色で胎土に石英粒を含む。

高杯(6)

口径14.5cm、杯部の高さ6cm、現存高9cm。杯部はやや内彎する底部に、外反する口縁部を接合し、段状の稜をつくっている。端部は角ばって終る。脚部は大半欠損しているが、なだらかな裾広がりの状態を示し、三孔を等間隔に穿っている。脚部外面は縦方向の刷毛目整形を施す。

土製支脚器(8)

現存高12cm。台部外面は水平方向のタタキ目整形が施され、内部は空洞で、二方向より箒で抑えられている。長さ約7cm、径約8cmのやや内側に彎曲気味の把手状のものが2本斜め上向きに接合されており、接合部分は指押えによる跡が残っている。

土鍋(2)

口径24.6cm、腹径24cm、器高17.1cm。短かく外反する口縁部で、横ナデ整形の上に指押えを施している。端部は丸く終っている。胴部外面は凹凸が見られ、施文具による整形痕は認められない。内面も外面同様であるが、凹凸はない。口縁部との境目に箒による沈線が2本走っている。底部は欠損しているが、丸底であろう。煤の付着が見られる。

須恵器

小型長頸壺（1）

口径 8.5 cm、高さ 15.5 cm、胴部径 13.4 cm。外側に傾斜して立つ口頸部で、上部はやや内彎し、先端は丸味をもって終る。中ほどに右下りの篦引き文が施されている。厚さ 4 mm。腹部は、やや丸味のある肩で、底は厚い平底である。中央部よりやや上に、櫛齒列点文を施す。胎土及び焼成は良好で胴部には自然釉がかかっている。

第 6 章　まとめ

今回の調査規模は、巾 6 m、長さ 45 m の範囲で、その中にピットを検出したが、まとまった形でピットをとらえることができなかつたのは残念なことである。この地域で注目されたのは、溝、竪穴式住居址、土器群である溝と竪穴式住居址の前後関係は、すでに遺構編で述べたとおりであるが、出土した土器から察するところ、ほぼ同時期すなわち庄内式の時期としてきしつかえないであろう。住居址は、推定 4 m × 4 m の規模の隅丸方形の竪穴式住居である。この住居址には周溝は見られなかつたが、同様の例は、北へ約 500 m 離れた七ノ坪遺跡に於いても見られることが報告されている。これは和泉地方に於ける特色であるのかどうか、今後の資料を待ちたいところである。他に、この住居址には 2 個の炉があったことが特異とされる。同時期のものか、時代差があるのか不明である。

出土した土器は、土師器、須恵器、瓦器等であった。このうち土師器が特に注目されるところである。粗いタタキ目整形を施した平底の土器が溝から、住居址からは溝と同様のもの他に、尖底気味の土器が 1 点含まれていた。土器群からは、粗いタタキ目整形で平底の土器と、細かいタタキ目整形で尖底の土器が共伴して検出された。このうち、粗いタタキ目を有した土器は、弥生式土器の畿内第 V 様式の形態を引くものと考えられるが、両者の間に一線を引くことは困難であろう。細かいタタキ目を有した土器は、丸底に近い尖底で、器壁が

極めて薄く、内面は篦削りが施されている。この土器は胎土に黒（金）雲母が含まれており、河内から運ばれてきた土器と考えられる。この二種類の土器が、庄内式の時期の土器であることは間違いない。近年古墳出現以前に属する（すなわち弥生時代のすぐ次の時代）土師器の資料が各所で発見されているが、当遺跡に於いても、近くに弥生時代の遺跡である池上遺跡が存在し、和泉地方に於ける弥生式土器から庄内式へ移向する間隙を埋める資料を提供している。

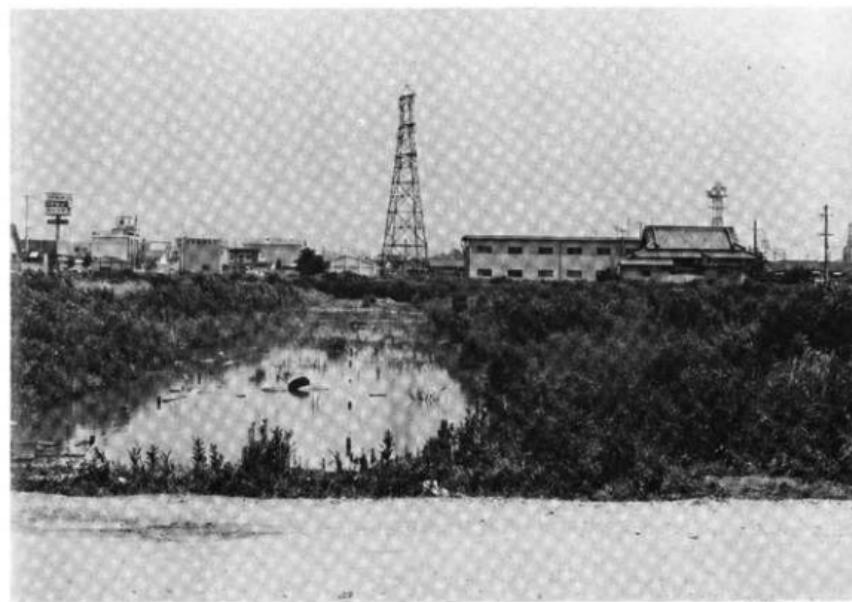
角状の土製支脚器は、台部分に粗いタタキ目整形が施されているところより、庄内式の時期のものと思われる。この種の土器は、日本全国でわずかに発見されているが、近畿地方に於いては例を聞かない。これによって、弥生時代に見られなかった煮沸道具が、その次の時期早々に出現したことがうかがえる。この煮沸形態の変化は、熱効率を上げたと言えよう。

昭和49年度実施予定の調査により、さらに資料の追加が見込まれ、豊中遺跡の性格が明確するものと期待する。

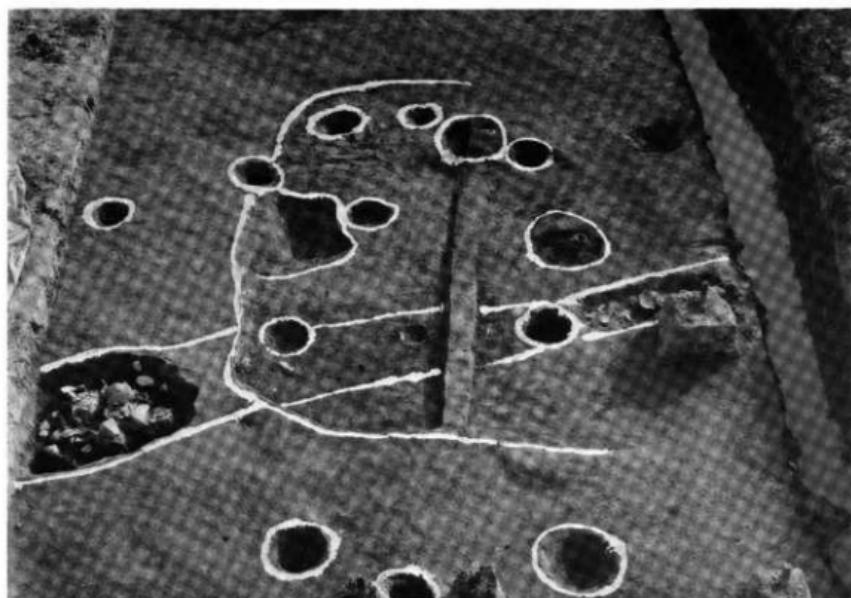
図 版



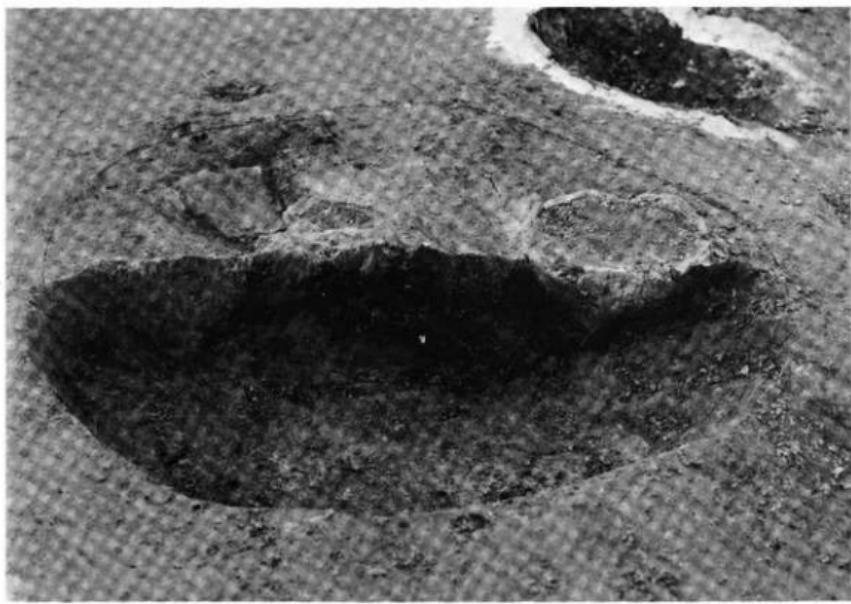
調査地(西から)



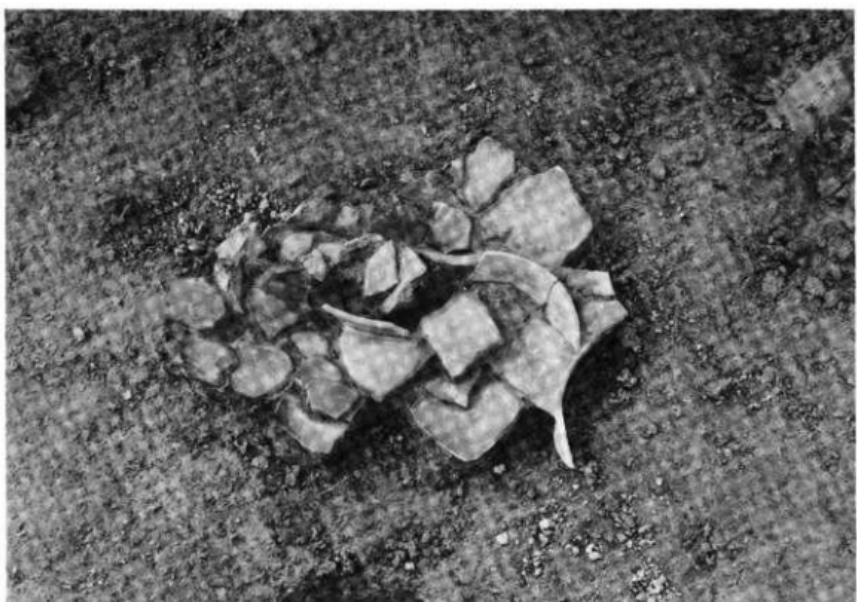
調査地(南から)



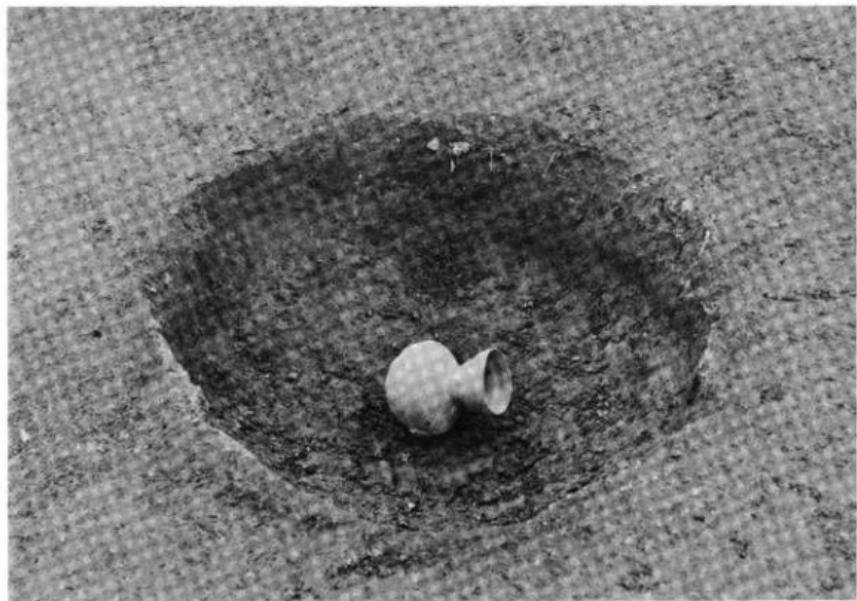
住居址及び溝



1号炉址



土器群出土土器一部(A地区)



大形ピット内出土須恵器(B地区)



4



5

出土遺物(1)

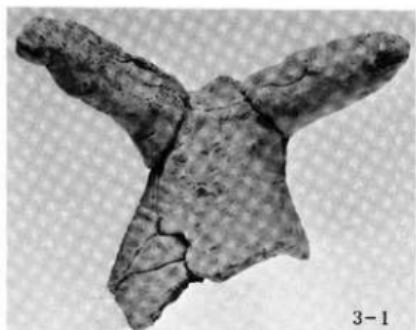


8



9

出土遺物(2)



3-1



3-2



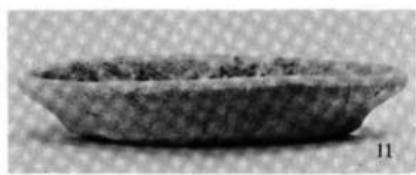
2



1



10



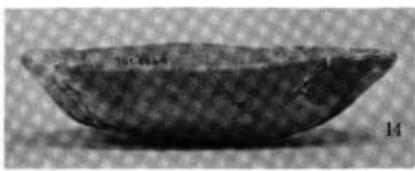
11



13

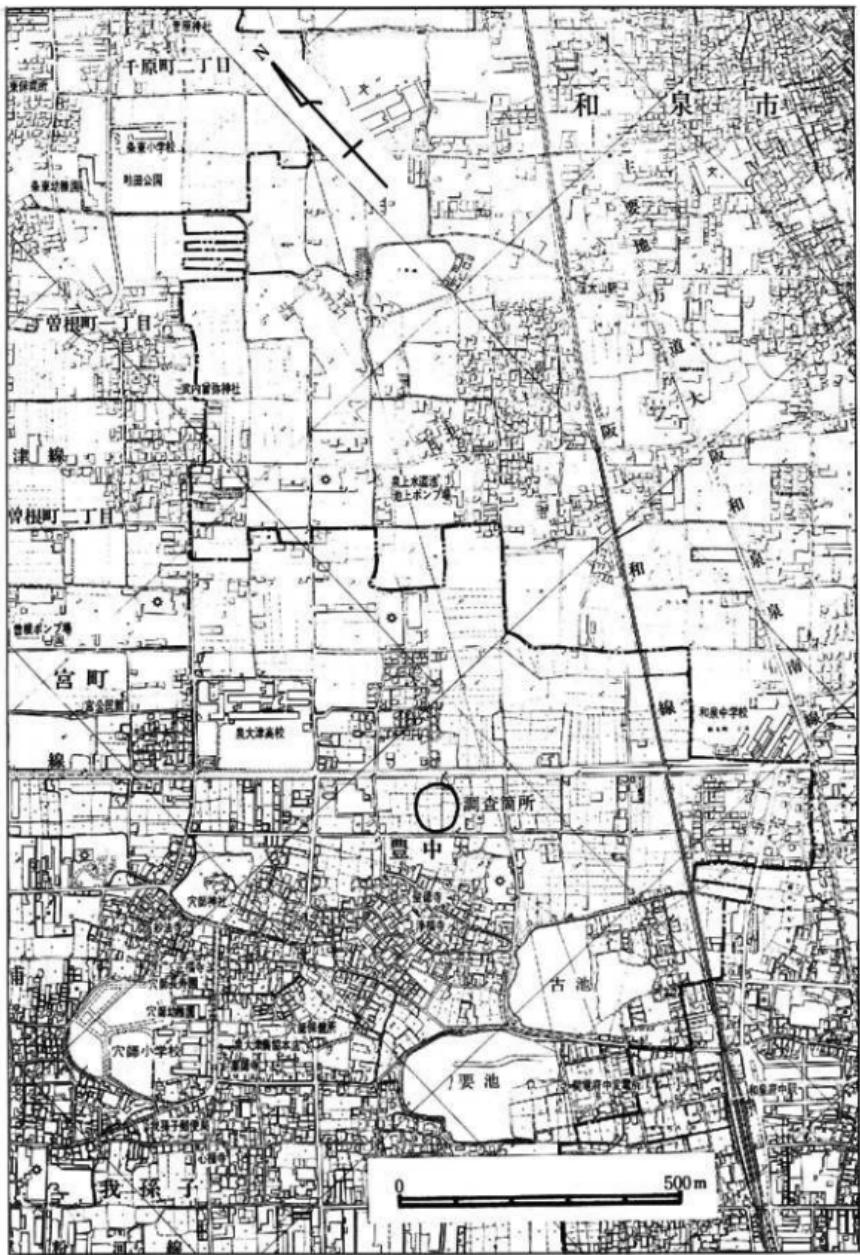


12



14

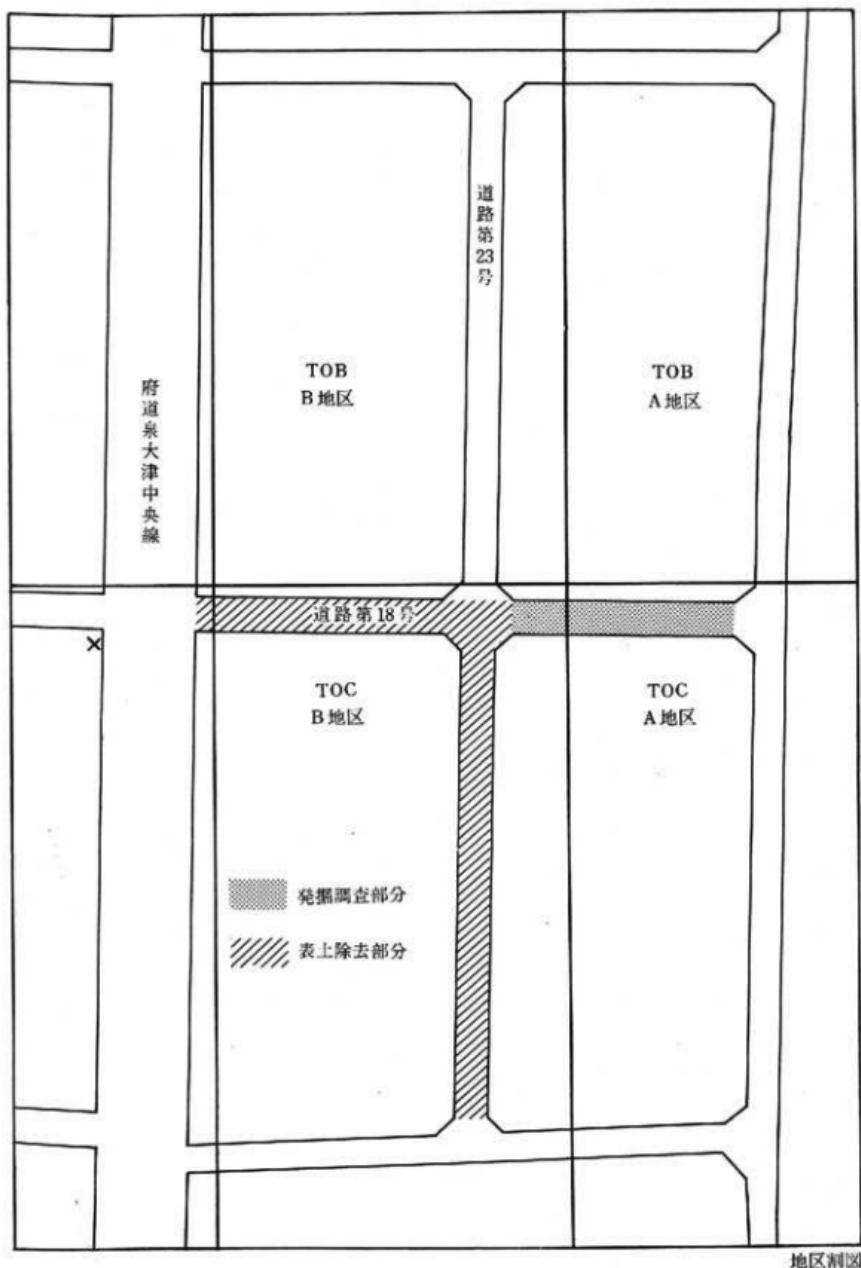
出土遺物(3)

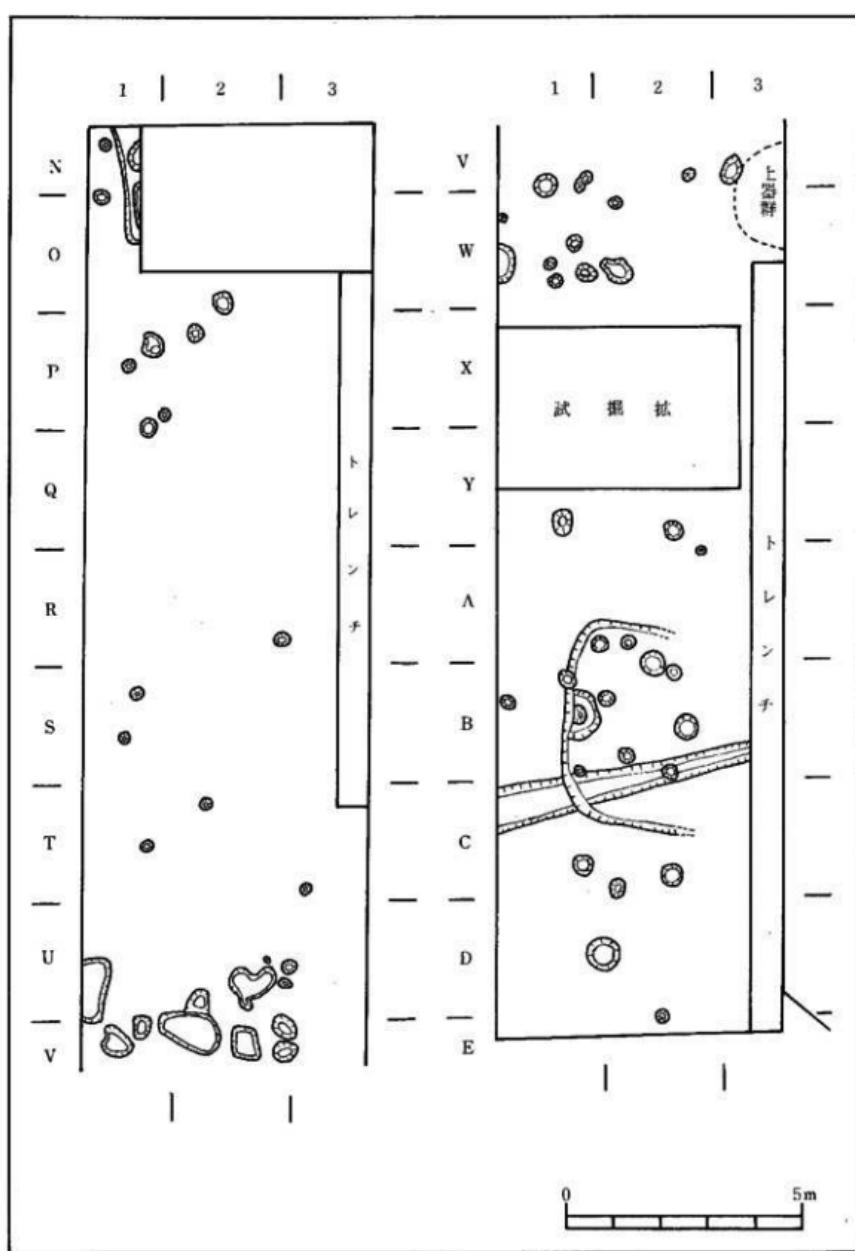


調査位置図

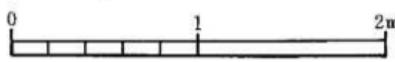
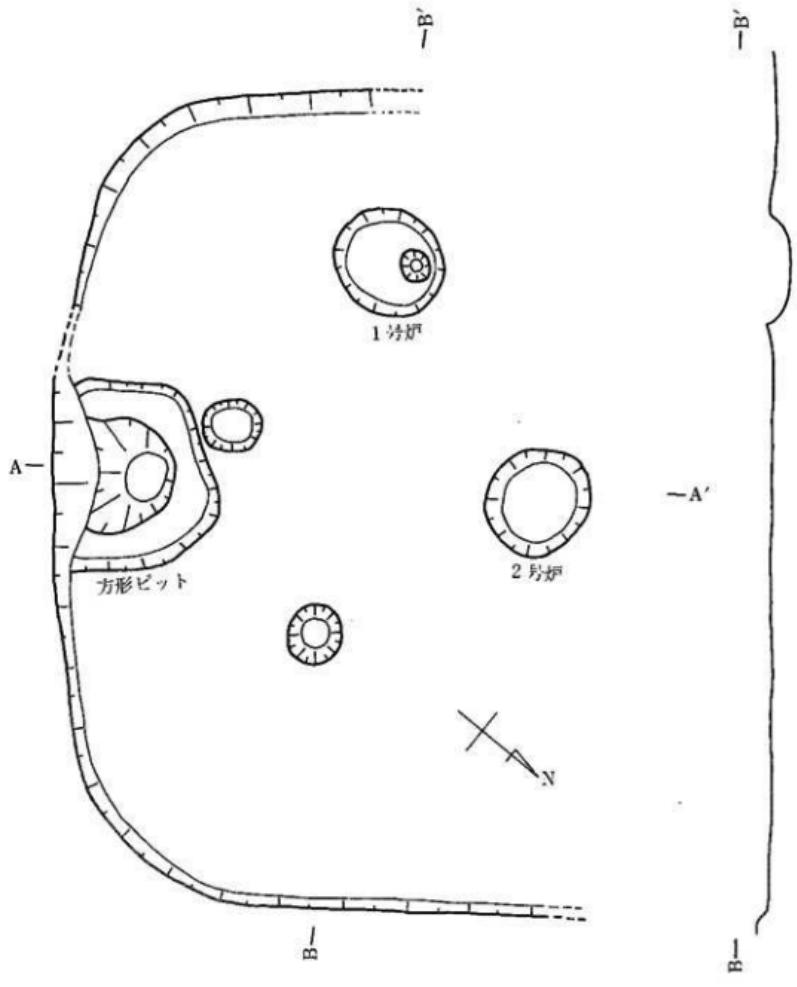


豊中遺跡 2. 池上遺跡 3. 七ノ坪遺跡 4. 古池遺跡 5. 和泉国府跡 6. 池浦遺跡 周辺の遺跡

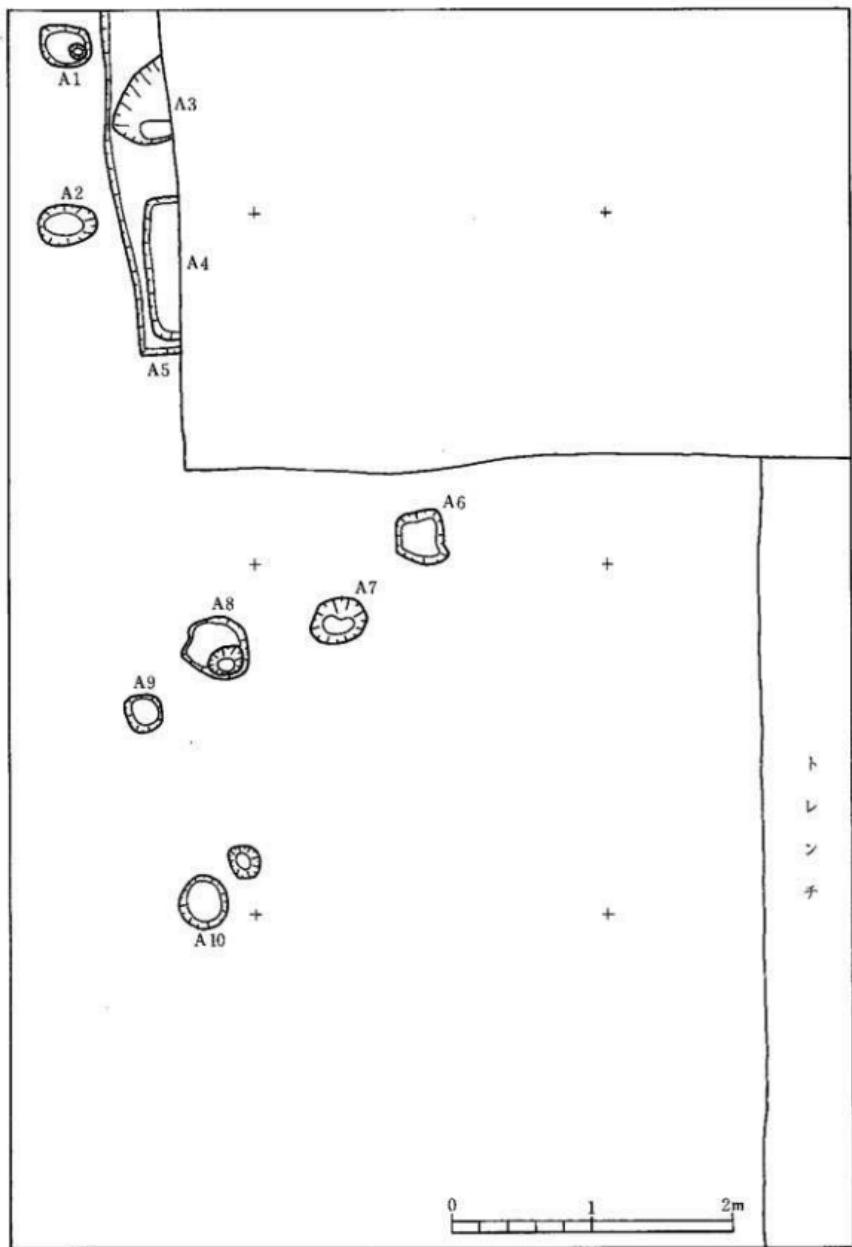




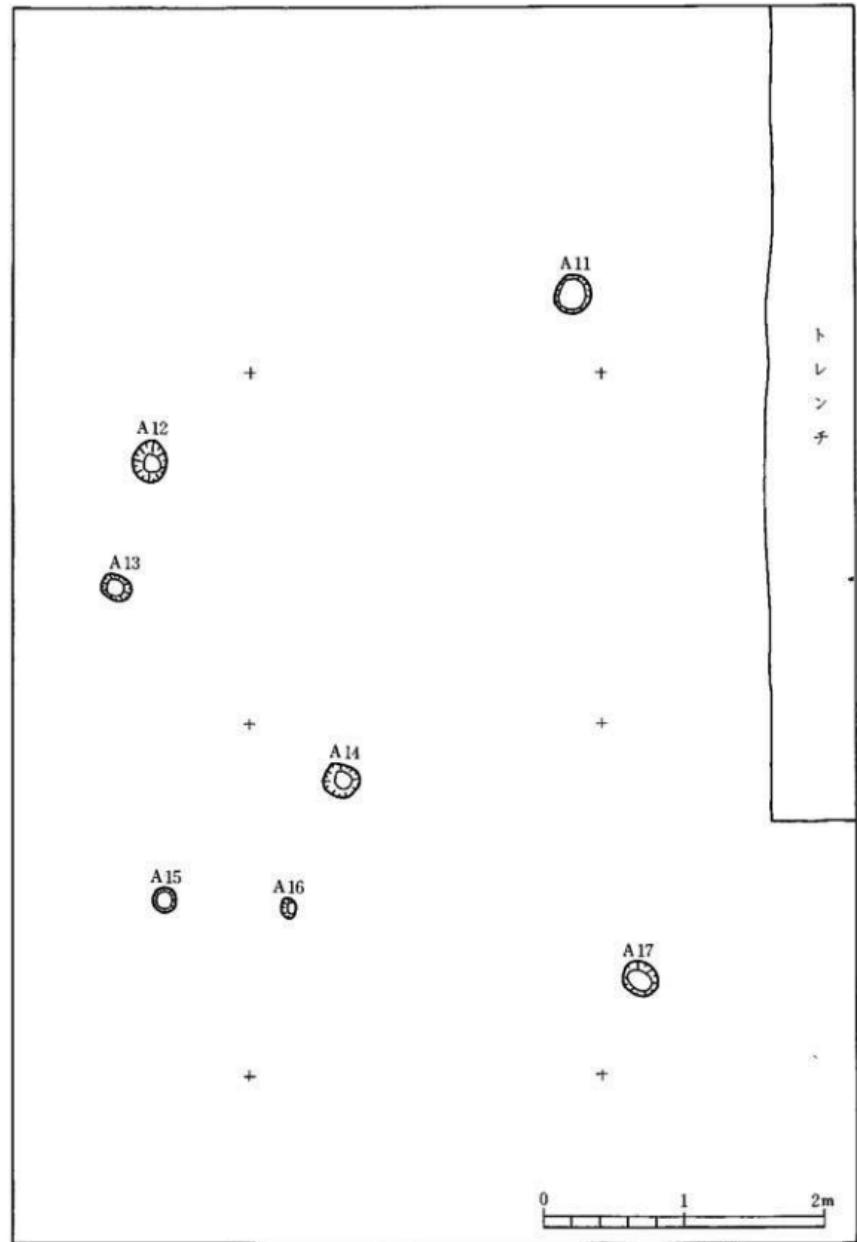
遺構全体図



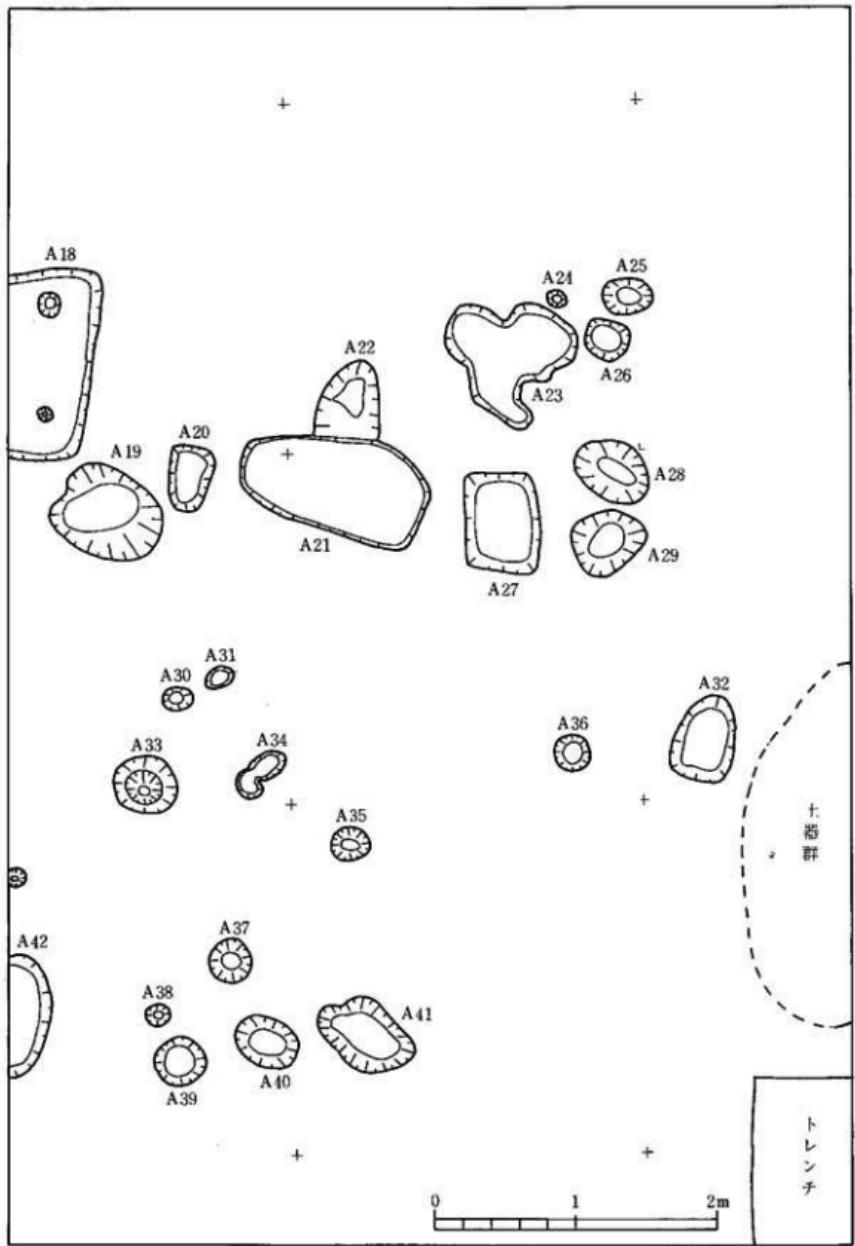
住居址

ト
レ
ン
チ

遺構図(1)

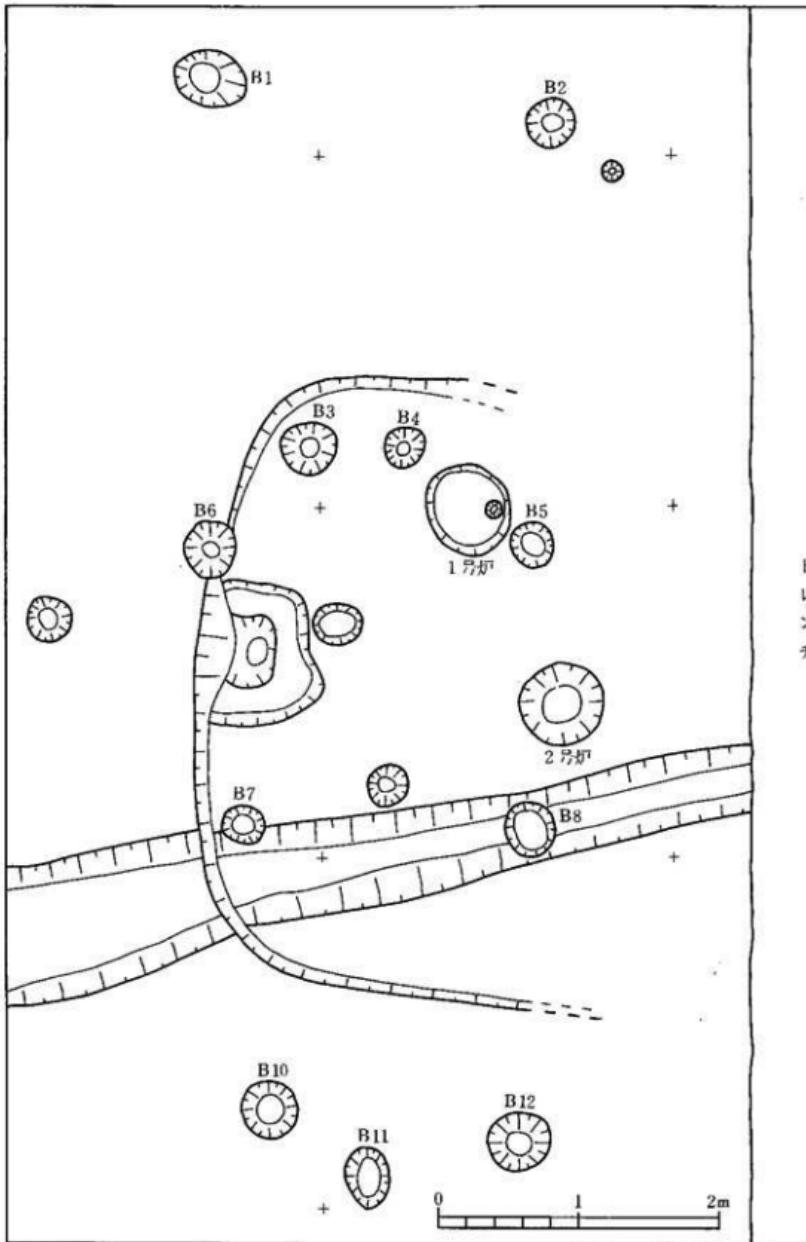


遺構図(2)

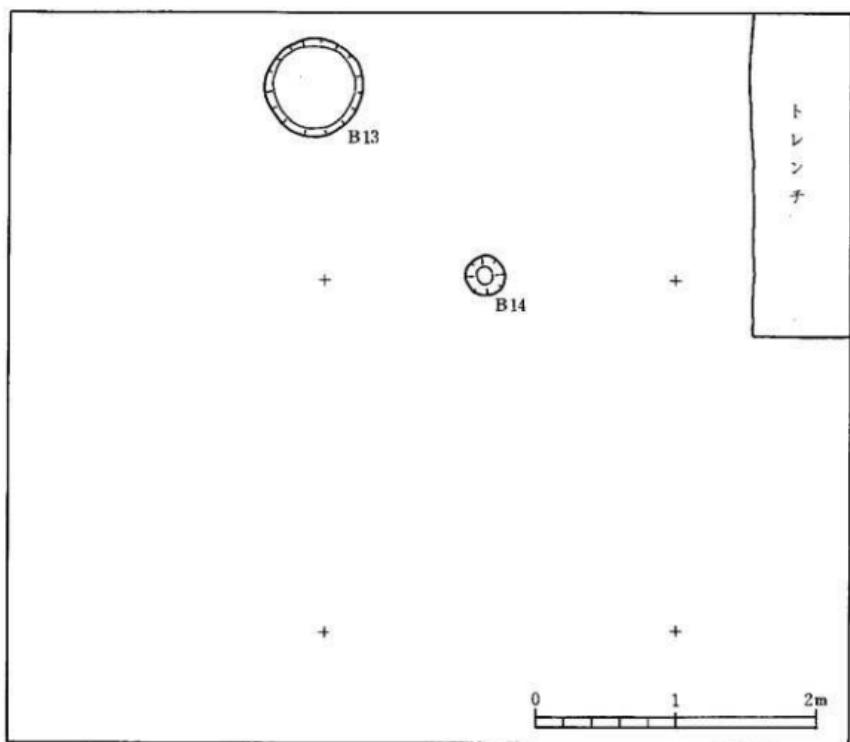


遺構図(3)

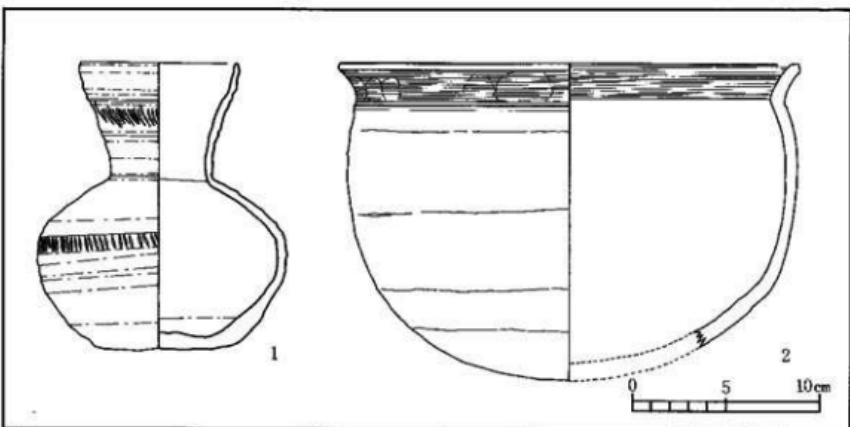
トレンチ



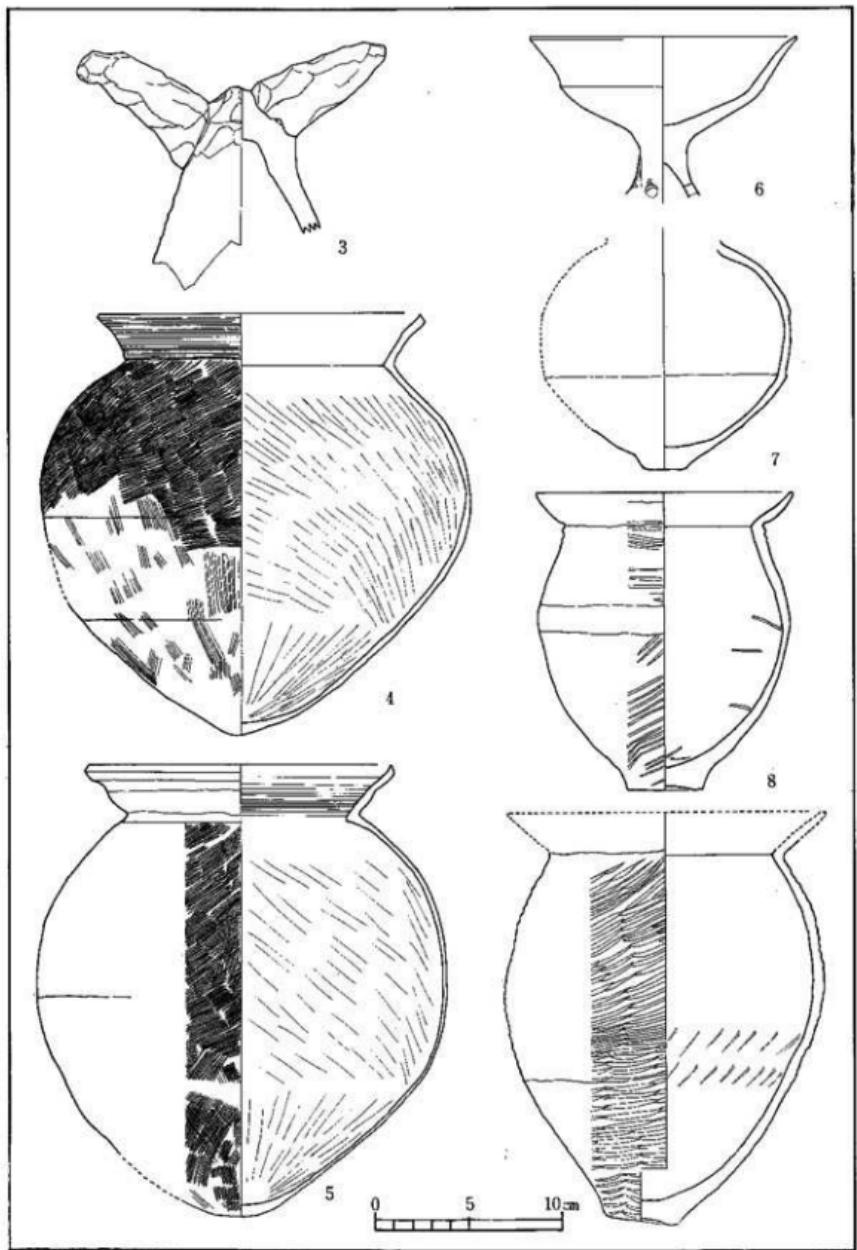
遺構図(4)



遺構図(5)



遺物実測図(1)



遗物実測図(2)

